ISSN-0913-1906

阡陵

No. 33

関西大学博物館彙報
平成8年9月30日発行

〔SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT〕

注口土器（出土地不詳）

目 次

鑑真和上啓航東渡地 …… 2
臺灣布政使司衙門跡 …… 4
地震被害をふせぐちいさな工夫―西宮市立郷土資料館の場合― …… 6
藤村と絵画 …… 8
「内藤湖南展」開催にあたって …… 10
占領下日本の輸出商標―2― …… 12
平成7年度調査報告―千葉県下の遺跡と博物館施設― …… 14
編集後記他 …… 16

関西大学博物館
〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
Tel 06-368-1171（直通）
FAX 06-388-9928

鑑真和上啓航東渡地

網　干　善　教

本年（1996）４月、後藤田正晴元副総理を顧問、林義郎元大蔵大臣を代表とする第６回日中民間人会議に委員として北京に赴いた。会議は日中両国間で当面する政治、経済、文化の諸問題に活発な討議が行われた。そして会議終了後、希望者は上海及び長江の右岸、江蘇省張家港市の招待をうけて視察することになり、小川平四郎初代駐中大使御夫妻、野田英二郎日中協会副会長（元駐印大使）大塚豊広島大学教授、坂本義和東京大学名誉教授、逸見博昌日本国際教育協会理事長、横堀克己朝日新聞論説委員、白西紳一郎日中協会事務局長らと同行した。

張家港市は東側で上海市と接し、南側で蘇州に接し、面積約1,000平方粁、人口約82万人の港湾都市で、10年前の1986年に市制を施行した新興の都市である。

そうしたことのほか私が最も関心をもったのが、彼の有名な鑑真和上が、日本への渡航を志して５度の失敗の後、失明したにもかかわらず、６度目に遂に成功し、わが国の文化の発展に大きく寄与したその船出の港である鹿苑鎮黄泗浦（ルュアンツェンホアンシープー）がこの市域にあって、新しく記念館が建立され、現在最後の仕上げの作業が行われている現状を視察することができたのである。

いうまでもなく鑑真は江蘇省揚州の出身で、14歳で智満禅師について得度、出家し、大雲寺に居住した。19歳になった神龍元年（705）道岸禅師から菩薩戒をうけ、景龍元年（707）長安に赴き、研学し、翌景龍２年（708）に長安実際寺で戒を受け、その後揚州大明寺に帰住した。開元21年（733）に遣唐使眞人多治比広成の入唐に随行した栄叡・善照らが舎人親王の要請で伝戒師の招来を求めていたところ鑑真のことを聞き、天宝元年（742）に大明寺に赴き、来日を請した。これをうけて鑑真は東渡を決意し、栄叡らは造船し、祥彦・道興ら21人を従えて出航したが、海賊に遭った。難を逃がれ、天宝２年(743)12月、弟子11人と共に再度揚子江狼溝浦より出発したところ暴風に遇い、断念した。さらに桑名山に到らんとしたが、再び暴風に遇い中断する。天宝３年（744）福州において造船し、温州から再度渡航を志したが、江東道探訪使が鑑真の渡航を禁止するという事態になり、揚州の崇福寺に帰還した。

その４年後の天宝７年（748）、揚州新河から５回目の渡東を試みたが、また暴風に遭い、泊舟浦に漂着し、目的を達することができなかった。その後栄叡が端州龍興寺において遷化する不幸に見舞われ、そのあと鑑真自身が失明する結果となった。

東渡を志すこと11年、天宝12年（753）遣唐大使藤原清河、副使大伴胡麿らの訪唐によって、再度来日を請われ、大伴氏の船に便乗し、法通、曇静、思託、義静、法載、法成ら14人と共に６回目の訪日に挑み、同年12月、鹿児島県の秋妻屋浦（現在の川辺郡坊津町秋月）に上陸した。それは孝謙天皇の天平勝宝５年であった。その後九州大宰府、難波を経て翌天平勝宝６年東大寺に到着した。時に66歳であった。この時鑑真は佛舎利のほか阿弥陀、薬師如来、弥勒、観音菩薩の像をはじめ、華厳、涅槃、佛名経などの経典を聖武上皇に献上、これに応えて上皇は伝燈大法師の位を贈った。また、東大寺の金堂前に戒壇を設け聖武上皇、皇太后、孝謙天皇らが登壇受戒した。その後大僧正に、天平宝字元年（757）には大和尚に叙せられた。そして新田部親王の旧宅地、平城右京五条二坊の地に唐招提寺を建立、勅命によって受律受戒が行われ、佛法の興隆に尽した。

その後、天平宝字７年（763）、76歳で唐招提寺において遷化された。

鑑真は５回の不成功にも、さらに失明にも悔いることなく、東渡を果し、日本佛教のみならず、政治、文化などに大きな影響を与えた。天宝12年10月19日、６回目成功の出発地が現在の張家港市の黄泗浦であるとされる。

張家港市ではこの黄泗浦の故跡を整備し、傍に鑑真像を安置する記念館（堂）を建立した。建物は日本の寺院を模した立派なものである。

平成８年４月７日(月)、ここを訪れた時は建物は殆んど完成し、周辺の植樹や道路の整備工事が行われていた。請われるままに「黄泗浦啓航東渡成功地」と墨書しておいた。現地の案内書には、次のような記念堂設立の趣意書の記述があった。

鑑真和尚が六回目渡航成功の所は江蘇省張家港市鹿苑鎮黄泗浦である。一千二百三十年も前、鑑真和尚は多く弟子を率いて、この所から海を渡って、やっと日本に到着し、長年の願いがかなった。この吉祥の所に立って、鑑真渡航の遺跡を参拝すると、さらに中日文化交流促進するために重大な貢献をささげたこの古人を偲ばずにはいられない。

以前の黄泗浦は荒涼たる原野であり、貧しい所であった。ところで現在の黄泗浦は交通が発達し、著しい発展を遂げて、人を引きつける所になった。今、世界が平和と発展及び中国国内の改革開放の環境で、中日友好をシンボルとして黄泗浦も飛躍的な発展の翼を伸ばすであろう。

鹿苑鎮人民政府は15ヘクタールの土地を準備して、鑑真渡航記念館を建てるつもりである。(以下略)

完成近い鑑真渡航記念館

鑑真和上東渡の黄泗浦復原整備地

臺灣布政使司衙門跡

松　浦　　章

1

中国の史書に古く夷州、東鯤等と記されているのが現在の台湾と言われている。台湾の記録が明確になるのは明清時代になってからのことである。特に17世紀の初めに、オランダ東インド会社が東アジアへの拠点としてタイオワンと呼称された現在の台南市の安平を占拠して以降のことである。その後、日本で国姓爺として知られる鄭成功が台湾を反清復明、即ち満洲族の建てた清朝を倒して漢民族の明朝を再び復興する根拠地としたが、彼は志半ばで死去し、さらに彼の孫の鄭克塽の時代に清朝に降伏したため、台湾が清朝の支配の中に入ったのである。清朝時代の台湾統治の拠点の一つであった布政使司衙門の建造物の一部が、台北市内に残されているのでここに紹介したい。

2

清朝が台湾に府治を設置して統治を開始したのは、康熙二三年（1684）のことである。台湾府を設けて福建省に隷属した。その台湾府の治所は現在の台南市に設けられた。台湾府には諸羅縣、鳳山縣、台湾縣の三縣が設けられた。諸羅縣と台湾縣は現在の台南市及びその近郊にほぼ該当し、鳳山縣は現在台湾における第二の大都市である高雄市とその近郊を含む地にあたる。このことからも明らかなように、清朝の台湾支配は台湾の西南部から始まったのである。

台湾は高温多湿の気候であるため植物の栽培に適しており、清朝時代は産米区として有名であった。とりわけ、人口が多く耕作地の少ない対岸の福建省は他省に米の供給を仰いでいたため、福建省にとって台湾は米穀供給地として重視されていた。さらに、豊かな農業生産力を有していた台湾を目指して福建、広東省からの移民も多かったのである。清朝は治安維持の関係から大陸から台湾への民衆の渡航に制限を設けたが、禁令を無視して多くの人々が台湾に渡ったのである。特に福建省の南部にある厦門（アモイ）は台湾への渡航の窓口であった。このため福建南部の人々の台湾への渡航に占める割合が高かったと言われる。この結果、長らく台湾南西部の台湾海峡に面した沿海地区が開墾の中心地であったのである。

清朝は台湾統治を重視するため光緒十一年（1885）九月に福建巡撫を台湾巡撫と改め、台湾巡撫を設置した。さらに、光緒十三年(1887)二月には台湾を福建省から分割して、台湾省とした。このため台湾布政使司衙門を台北に設置したのである。台北に府治が設置されたのはそれより少し古く光緒元年（1875）六月のことである。両江総督の沈葆楨の上奏により台北に一府三縣を設けることになり、府治は艋舺付近に置かれた。現在の台北市の艋舺である。台北府は淡水縣、新竹縣、宜蘭縣の三縣と基隆庁を管轄した。

3

台湾省は台湾巡撫のもと布政使、按察使がおり、その下に台南を統治する台湾知府、台北を統治する台北知府がいた。

台湾の布政使司衙門はもとは、現在の台北の中山堂付近にあり、清朝時代にあっては官庁街を形成していたのである。ここに紹介する旧時代の布政使司衙門の建造物は台北市内の植物園内にある。植物園は重慶南路、南海路、和平西路、愛国西路に囲まれた地にある。植物園は、もと1896年日本統治時代に台北城の南部に台北苗圃として建設したのが始まりで、その後、周辺の地を購入し拡大して1939年には台湾総督府林業試験所植物園となり、一般に植物園と略称され、今日まで続いている。この植物園内に布

（写真１）旧時の台湾布政使司衙門

政使司衙門の建造物が残されたのである。それは、この建物が林業試験所の職員宿舎として利用され、さらに1964年以降には「林業陳列館」として使用されていた。しかし、破損がひどく1989年にはそれも閉館となった。その後、文化財の保護の観点から修復され旧時代の布政使司衙門（写真１）の建造物を再現することになったのである。

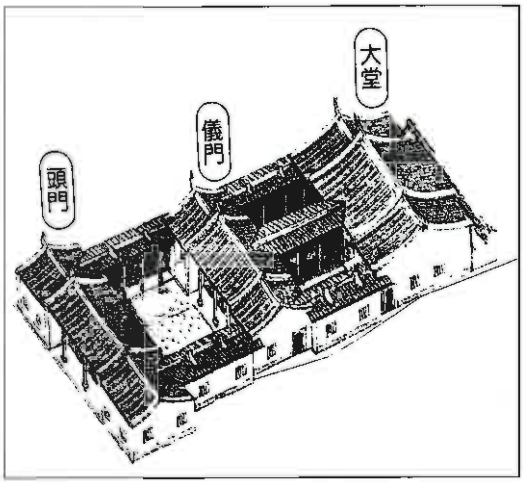
現在残されているのは布政使司衙門の頭門（写真２）である。頭門内の構造は中庭があって儀門があり、さらに進むと大堂があり公務の場となっていた(写真３復元図参照)。頭門に向かって右手の壁に中華民国五三年（1964）四月の期日で台湾省林業試験所所長が記した「修建築林業陳列館記」が納められている（写真４)。それには、この布政使司衙門の建造物が光緒十九年（1883）に建てられたことが知られる。現存の建築物は布政使司衙門の籌防局の一部であった（荘展鵬氏編『台北古城之旅』遠流出版事業股分公司、1992年３月、94～95頁参照)。

4

高温多湿の台湾にあって110余年前の建造物が修復され残されていることは、清代の歴史を研究するものにとって重要な史跡である。中国大陸にあっては北京の故宮等の中央政府関係の建造物は知られるが、現代化を進める現状では清代の地方衙門の建造物が現存している例は希有のことである。その意味でも、大都会の中に保存されている布政使司衙門の建造物は貴重である。

この布政使司衙門の建造物に案内し御教示下さった台湾大学歴史系の徐泓教授に末筆乍謝意を表したい。

（写真２）台湾布政使司衙門頭門



（写真３）台湾布政使司衙門の復元図

（写真１、３は荘展鵬氏編『台北古城之旅』遠流出版事業股分公司、1992年３月、94～95頁参照による。）

（写真４）「修建林業陳列館記」

地震被害をふせぐちいさな工夫
—西宮市立郷土資料館の場合—

合　田　茂　伸

筆者の勤務する西宮市立郷土資料館（以下、資料館）は、1995年１月の兵庫県南部地震で施設、設備、資料に被害をうけた。その概要についてはすでに公刊されている(『西宮市立郷土資料館ニュース』第17号　1995年)。

資料館は、震度６あるいは７地帯に属するにもかかわらず、建物本体、展示設備の損壊はまぬがれた。図書をのぞく資料への地震の影響は、収蔵庫にくらべて展示室においておきく、保存と展示とが両立しにくいことをあらためて認識させられた。資料館の常設展示は、ジオラマをのぞいてガラス・ケース内展示である。ケースはいずれも建物本体に固定されているため、ハイ・ケース、ロー・ケースとも転倒はなかった。資料のケースからのとびだしはなく、損傷はこのケース内でおきた。

当時、ハイ・ケース内には民俗資料、ロー・ケース内には考古資料、歴史資料などが陳列されていた。民俗資料の一部は、有溝の木製壁面パネル（システム・パネル）にアクリル製フックとつり糸(いわゆるテグス)、または、金具と金属ワイヤで固定されていたが、フックにかけていただけの１点をのぞけば、落下したものはない。ハイ・ケース内の、システムパネルとおなじ型式の天板の展示台に陳列された民俗資料４点はすべて台上をすべって、落下したり、ガラスに衝突していた。ガラスに衝突した資料のうち、保存処理ずみの木製民具がわずかに損傷をうけた。システムパネルと同型の天板の展示台を撤去して設置していた布張展示台の民俗資料は、18点中１点がケース内の床カーペット上に落下していた。

歴史資料はおおくが紙製品であるので、ケース内移動のみで損傷はないが、ガラス文鎮に圧迫されてしわを生じているものがあった。

被害は、考古資料に集中した。土器、陶器はもともと衝撃や加速度によわいが、以下にしるす展示方法がその弱点に拍車をかける結果になった。

考古資料はよこすべりによってロー・ケースごとに東北方向に一気に集積されたかのようであった。考古資料の陳列方法は、１．直接木製天板の展示台上に陳列する、２．木製天板の展示台上のアクリル製のリング形補助具上に陳列する、３．木製天板の展示台のアクリル製展示台上に陳列する、４．木製天板の展示台上のアクリル製トレー＋発泡ポリエチレンシート上に陳列する、の４種があった。陳列法１はそのままよこすべり、転倒し、資料相互もしくは、ガラスケースに衝突し、損傷していた。陳列法２はアクリル製リングにのったままよこすべりして衝突していた。陳列法３は資料、アクリル製展示台ともにすべり、転倒、衝突、散乱していた。陳列法４は、玉や耳環のような小形資料の陳列であるため、トレー、資料がすべり、ケース内に散乱していた。

以上の結果からみて、当資料館の常設展示室内で資料を地震被害からまもるには、ケース内におかれた資料のよこすべりを防止すればよいことがわかる。館では軽快な展示空間をつくりだすためにアクリル製展示台を多用しているが、これが被害をもたらす一因になった。ケース内の展示ステージをすべてすべりにくい材質にとりかえることが良策かともおもえたが、木製システムパネルはよごれが付着しにくい、ほこりをすいこむことがない、などの長所もあり、このうえにフェルトをしきつめるようなことはかえって資料の汚染や錆害をまねくことにもなる。館の展示設備におおきな被害はなく、多額の費用を投じて展示を再構築することがなかったので、設備を変更することなく、地震後５か月のあいだに、わずかな費用と館員の手作業でおこなえる地震対策をほどこしながら、常設展示の復旧をおこなった。これが、ちいさな工夫である。工夫を実施するにあたって、展示資料を糸でむやみにしばりつけないことにした。醜悪だからである。

アクリル・リングの改造　金属やアクリルのリングは、不安定な土器を展示台上に正立させるために多用される。資料館のリングは直径80

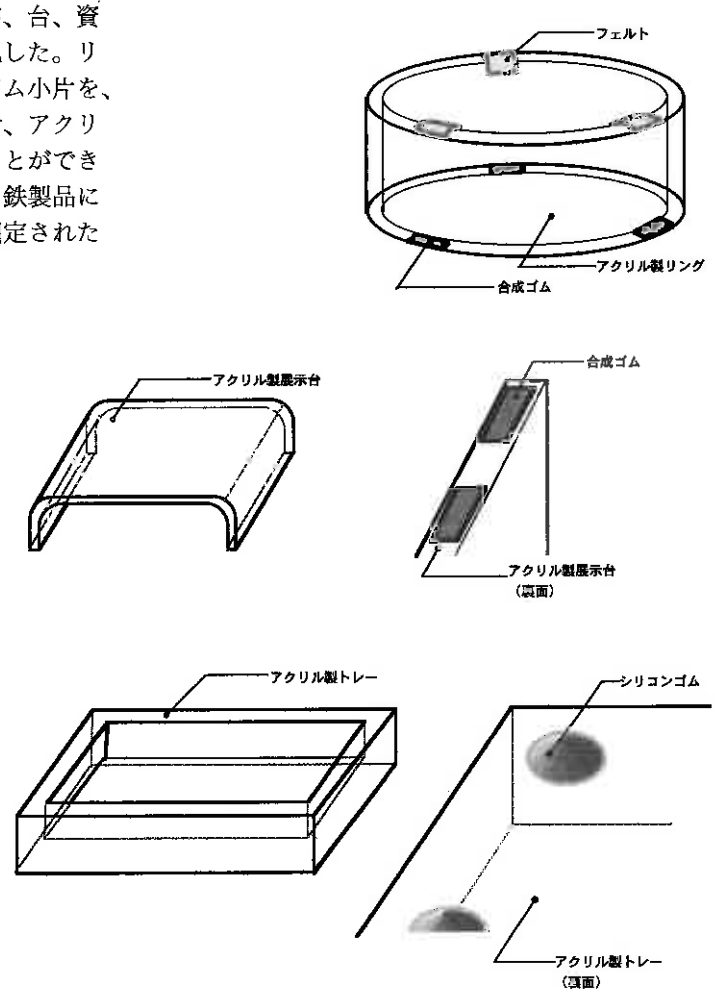
㎜、高さ20㎜、アクリルの厚さ４㎜である。これにのせた土器は鉢や杯で、転倒することなくよこすべりしていたので、リングが展示台上をすべりにくくすることで、被害をちいさくすることができる。ただし、リングを固定すると土器の転倒をまねく。そこで、下面には厚さ１㎜の適度なすべりどめ効果がある軟質の合成ゴム小片（２㎜×10㎜）を、上面には土器との衝撃緩和材としてフェルト小片（５㎜×10㎜）それぞれ３か所に接着した。簡単な実験では、水平動によって土器とともにリングがすこしずつよこすべりするが、転倒することはない。フェルトによって土器のがたつきもなくなった。

アクリル展示台の改造　アクリル展示台は、厚さ５㎜の透明アクリル板を「コ」形におりまげたものを使用している。これには、鏃や馬具など古墳出土の鉄製品をのせていたが、台、資料ともよこすべりしてケース内に散乱した。リングとおなじく、展示台下面に合成ゴム小片を、上面にはフェルトを接着した。これで、アクリル展示台からの落下をかなりふせぐことができる。なお、フェルトはその吸湿性から鉄製品には不向きな材料であるので、樹脂で固定された鉄製品にのみもちいることにした。

アクリル・トレーの改造　アクリルトレー上の資料はトレーが他のものに衝突した衝撃で散乱したものとおもわれるので、トレーの固定が効果的である、とかんがえた。展示ケースの構造上、金具での固定はできないので、トレー下面にシリコンゴム製のすべりどめをトレーのおおきさに応じて接着した。この場合は、トレーののる木製板を30度ほどかたむけてもすべりださない程度の効果がある。

石器の陳列　石器は展示台との接地面がちいさいので、フェルト上でも回転や、よこすべりをおこしやすい。やむなく糸を使用することにした。断面「工」形アクリル製フックにあなあきアクリル板を接着し、さらにその上面にフェルトをはりつけた。フェルト上に石器を糸で固定したものを、木製板の溝にさしこんだ。これで、石器の散乱は防止できる。

以上の工夫からぬけおちた展示資料がある。壺や高杯など、自立する土器である。これらは、今回の地震では復元石膏部分の脱落や破損といった被害にとどまっていることもあり、とくに対策をほどこさなかった。しかし、これらについてもあなあきの展示台や固定ワックスなどをもちいることなく、よこすべり、転倒をふせぐてだてをかんかえなければならない。透明材料によるおおきな円筒によって保護する、というような案もだされた。糸で展示台に固定する以外に方法はないものだろうか。



展示補助具のちいさな工夫

藤村と絵画

加藤一朗

作家で絵の好きな人は多い。ゲーテの風景スケッチは堂に入ったものであるし、漱石の水彩画も楽しい。藤村も例外ではなかった。というより、絵画は氏の生活・創作活動と密着していたといえよう。これは、(姻戚関係から)青少年時代を氏の身辺近く過した筆者の想い出と感慨である。例えば、氏は『老嬢』という短篇の挿画を美人画家鏑木清方に依頼しているが、このときヒロインの自筆の略画を参考に鏑木氏に予め送りとどけている。どうも筆者の感じでは、画伯の描いた束髪のヒロインより、藤村がもっと古風な髪型に描いた参考図の方がよりよく当時の婦人像を表わしていたような気がした。また氏は小諸時代、『千曲川スケッチ』を書き始める前、ラスキンのターナー論の影響をうけて、「雲の記録」を毎日綴っていたといわれる。この稿はのち氏の手で破棄されてしまったらしいが、多分に絵画的な叙述を含んでいたと思われる。画家たちとの交友も生涯つづいていた。早くは小諸時代に、夭折した天才画家青木繁が氏を訪れているし、『水彩画家』のモデルといわれる丸山晩霞とも親交があった。あと有島生馬、石井柏亭・鶴三兄弟、安田靫彦等々との交流はつづく。有馬氏が日本で初めてセザンヌの伝記を訳出したとき、その仏文原本を彼に送ったのも藤村であった。氏は旅するたびに手帳をたずさえ見聞をメモしたが、これにはいつも、氏の誠に柔かな筆緻の略画がそえられていた。氏の絵画の愛好と才能とは息子たちに伝えられ、次男鶏二、三男蓊助は洋画家となった。前者はパリに学んで二科会に属し、後者はベルリンに学んだ。

さて、藤村がもっとも心酔していた画家は雪舟であった。氏が『山陰土産』を書いたときの旅行に鶏二を連れていったのも、雪舟の故地に鶏二をなじませようとしたものではなかったか。雪舟といえば想い出すことがある。氏が未完・絶筆となった『東方の門』の構想を練っていたころのことである。よく氏は番町の新居の、畳

鶏二(次男)筆の藤村のデスマスク

石井鶴三作「藤村座像」

敷きの応接間に雪舟の「山水長巻」の複製を広げて、いつまでも眺めていた。氏は言った。「こんどの作は、永徳の筆の力強さと雪舟の長巻の連続感で行くつもりです」と。狩野永徳の遺作の数は少ないが、日光にある獅子の図などはいかにも力感にあふれている。この番町の家の応接間にはもう一つの想い出がある。そのころ、画家であると同時に彫刻家でもあった石井鶴三が藤村に肖像画を描きたいと申し出た。藤村は「石井さんでしたら彫刻にして下さい」と望んだ。こうしてこの応接間で、氏は約一週間にわたり、毎日一時間ほど石井氏のモデルとなった。氏はあとで「モデルとなってじっと座っているということは仲々大変なことでした」と語っていた。彫刻制作の一般的な手法なのであろうか、石井氏は太い針金を正座している藤村の胴から頭にかけての線に似せて折り曲げ、これに固まらないように油で練った粘土を手際よくからませていった。筆者は毎日この二人の様子を見ていたわけではないが、石井氏が指に爪を彫っていたとき、藤村は「爪を作るのはいやですね」と言い、石井氏はその場で爪の部分を消し去ったという。この話は、当時洋画の写実主義と印象主義との違いに関心をもっていた筆者にとって、一つの解答が与えられたような気がした。藤村の書いたものを読むと、氏が文学上の印象主義についても深く思考していたことがわかる。

パリ時代の藤村は、フランス語を学ぶかたわら、音楽会や美術館にもよく足を運んだらしい。音楽については小さなホールを訪れることを好んだといわれるが、ドビッシーの曲などの印象主義的なものを愛好していたのではあるまいか。もともと若くして詩人として世に出たころ、詩作のために音楽学校に通ったというほどで、音楽に造詣は深かったわけであるが、すべてに感受性が人一倍強かった氏は、当時「良い音楽を聴くと涙がとまらなかった」と書いている。絵画の場合にも印象派などの作家に関心が深かったと想像されるが、「マチスぐらいまではわかりますが、そのあとになるとわかりませんね」と語ったことがある。抽象画やいわゆるモダンアートは好きになれなかったのかも知れない。一方、印象派の盛んだった時代の作家であったが、装飾風の絵を描いたシャヴァンヌに対する愛好

（16ページへ続く）

藤村のスケッチ

「内藤湖南展」開催にあたって

小　林　弥生子

平成８年４月から５月にかけての約２カ月間、博物館企画展として「東洋史学の泰斗―内藤湖南―」展を開催した。折しも、関西大学100周年を記念して湖南の蔵書及び遺愛品が本学に寄贈されてから10年が経とうとしている時である。

以前（昭和60年４月～５月、本学総合図書館開館披露記念、於　図書館展示室）にも、本学所蔵内藤文庫の善本、稀覯書、軸物、刻字甲骨等約40点が展示公開されたが、今回は従前に展示した資料の中から12点を選りすぐり再度公開した。その他、湖南遺愛の文房具や家族集合写真、諸々の記念写真を加えて、「内藤湖南」像をより身近に表すことをテーマとした。

内藤湖南は慶応２年（1866）８月、秋田県鹿角市十和田毛馬内に内藤調一（号、十湾）の次男、虎次郎として生まれる。

1885年（昭治18年）に秋田師範学校高等師範科を卒業後しばらくは教師をしていたが、1887年(明治20年)、22歳の折に親に無断で上京。『明教新誌』記者や数々の機関誌の編集者、『大阪朝日新聞社』の記者等を経て、1907年（明治40年）10月京都帝国大学文科大学講師、1909年（明治42年）９月同教授となり、東洋史学第１講座を担当し、多くの俊秀を育てた。京都帝大退官後の1927年（昭和２年）に隠棲の地として京都府相楽郡瓶原村に「恭仁山荘」を設け、いささかも衰えずに研究と指導に励んだと伝えられる。「恭仁山荘」は、その後、湖南の蔵書・遺愛品と共に関西大学の所有するところとなり、改装の後、研修施設として利用されている。当時の面影を伝えるものとして「書庫」がそのままの状態で残されているが、稀代の書誌学者であり、大蔵書家でもあった湖南の書庫はほとんど伝説的存在であったという。

湖南は、家庭では四男五女の子宝に恵まれた。長男乾吉氏（号　伯健。1899―1978）は、東洋法制史学の基礎を築いた碩学である。本学「内藤文庫」の中には伯健氏の蔵書も多数含まれており、湖南の死後、『内藤湖南全集』全14巻をまとめあげたことでも有名である。

さて、この企画展に先立ち、「内藤文庫」として寄贈された蔵書の管理を行っている本学総合図書館のご協力により、展示品調査を行う機会があったが、その膨大な量には圧倒されてしまった。当時５万冊と言われた湖南の蔵書は、京大人文学科学研究所や杏雨書屋、その他の公的機関に分蔵されはしたが、現在本学図書館で目録作成中の漢籍善本のコレクションは推定３万冊を超える。今回展示することのできた『文史通義稿本』（清・章学誠撰）をはじめとして、湖南の学識と鑑識眼によった善本が殆どであり、湖南の自筆書き入れ本も少なくなく、湖南の学問を知るためにも極めて貴重なものである。

蔵書以外にも原稿類、書簡、写真、調査資料写真原版等、湖南の関わりの深いものが数多く残されている。なかでも、原稿類やメモの多さ

企画展パンフレット

に驚かされる。やや縦長の流麗な書式でびっしりと書き込まれているノートが何冊も保存されている。当時の有識者としては当然のことかも知れないが、全て漢文で書かれてある。

湖南の書は晋唐の正当派を宗とし、書家としても非常に名高い。今回の展示にあたり、湖南

展示風景

の書風を紹介したく数点の色紙を展示したが、小品とはいえ上品さを醸しだす作品である。湖南遺愛の硯や筆、文房具を額装した書の回りに配置してみたが、展示としてはいかがなものだろうか。湖南の書に触れ、それが書かれたであろう筆を手にした筆者の緊張感を感じてもらえたならば幸いである。

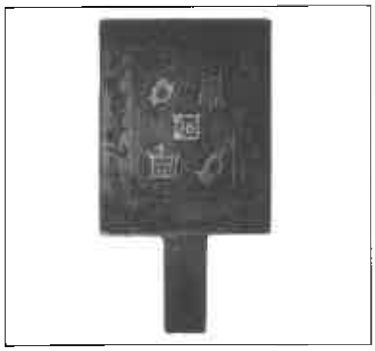
「緊張」といえば、博物館に収蔵されているものはどれも唯一無二のものであり、直接手に触れるときはかなり緊張するものであるが、昭和6年の「御進講」の原稿を手に取ったときはそれも一入であった。当時、湖南自身も非常に喜んだといわれている。この原稿は文具コーナーにさりげなく置いたが、当日持参したと思われる原稿だけでなく、丁寧に保管されていた宮内庁との連絡書簡をはじめ、下書き2点も並べて展示した。「東洋史家」として頂点を上りつめた湖南ではあるが、天性の素質ばかりではなく、その陰に隠れた努力をかいま見ることが出来たと思う。

湖南はその生涯に13回の訪中と1924年には欧州旅行を行っている。度重なる中国視察などに使用した旅行カバンを2点展示させていただいたが、そのうち1点の内ポケットから、胃薬が一服だけ出てきた。1933年（昭和8年）10月湖南最後の旅行となった満州へ持参したものと推測される。明けて2月に京大病院で本人には胃潰瘍と告げられたものの、胃ガンと診断されたことを考えれば、当時、「日満文化協会設立のために病軀をして渡満」の伝記の記述に胸打つものがある。昭和9年4月に前年10月訪中の返礼として鄭孝胥（1860―1938。「満州国」総理、清朝の遺臣。1882年挙人）が恭仁山荘を訪問、談笑した後、5月に吐血、6月26日午後1時に、逝去した。享年69歳であった。

今回の展示会は、当館にとって「個人」に焦点をあてた初めての展示であった。時間的な制約もあって、当初はどこまで「内藤湖南」の人物像に近づけるか不安を感じたが、観覧者に判断を委ねることとし、湖南の遺愛品、未公開写真等を客観的に展示することに終始した。

開館日数23日、入館者数1537人。期間中に多くの方に見学していただけたことをお礼申し上げたい。

また、展示にあたってご協力いただいた本学総合図書館ならびに折に触れ湖南のエピソードをお話下さった奥村郁三教授に深く謝意を表したい。



展示　No.11　五岳真形図形（白銅製）

展示　No.25, 27, 41　湖南遺愛の筆及び文鎮

展示　No.16　竹坨硯（木堂遺愛品）

占領下日本の輸出商標―２―
―東洋綿花株式会社の中国・華僑向け輸出商標―

山　口　卓　也

１　敗戦と占領軍の進駐からまもなく、GHQの指揮・指導によって敗戦直後の疲弊した日本の産業の復興が計られた。まず繊維産業で、1946年６月に特別枠での原料綿の輸入が認められ、綿糸布、綿製品が朝鮮半島向けに輸出されている。翌年８月15日には制限付民間貿易が認められ、1948年８月には民間貿易が解禁され、翌年から1950年１月には民間貿易が全面再開されている。1950年はサンフランシスコ講和条約が調印される頃には、繊維産業は顕著な回復を示している。しかし、この時期の繊維産業は国内需要向けではなく、外貨獲得のための輸出向けの比率が高かった。日本国内の民生面での復興は後まわしとされ、国内繊維需要が一応充足されてくるのは、朝鮮戦争以降であった。

この時期の繊維産業の輸出の実体を示す資料がある。占領期に大阪で印刷された東洋綿花株式会社（現トーメン：本社大阪）の輸出向け綿布等の商標である。

２　東洋綿花株式会社の輸出商標のうちの４葉を示す。縮尺は約50％である。

第１図の商標は、中国服の三人の子供が三本の「如意」に乗ったり支えたりしている絵柄である。「如意」は道教または仏教の僧侶の持つ道具の一つであるが、頭部に剃りのある子供が配されていることから、道教的色彩が濃い。周囲に枠を配しているが、枠の上には「三如意」、下には「東綿洋行」の文字がある。赤・紺・緑・金などの多色印刷の後、全面にニスを塗布して光沢を与えている。

第２図の商標は、長頭の白髭老人三人の顔と果実二つの絵柄である。上に「三壽図」とあり、長頭で禿頭部であることから、「壽老人」であると考えられる。「壽老人」は、中国では道教の仙人または神、日本では「福禄寿」として七福神に入れられている。周囲に枠を配しているが、枠の下には「TOYO MENKA KAISHA. LTD」の文字がある。

第１図

第２図

第3図

第3図の商標は、一基の「金鼎」の図である。鼎には下部に獅子の顔を配し、側面には環状取っ手が二つみられる。「金」の鼎の口には蓋がされており、装飾的な鼎である。周囲の枠には上に「金鼎」、下には「東綿洋行」とある。絵柄の背面は銀、鼎は金、周囲の枠にも金をあしらっている。

第4図の商標は、一基の「金鼎」から、冠と中国服の「道教神」が現れて、財貨を与えている絵柄である。財貨を与えられている弁髪・中国服の男は、服の裾で財貨を受けようとしている。財貨は、特徴のある形状から「元宝銭」と考えられる。右下には画印（「笹生」か？）がある。周りの枠には、上に「鼎發財」、下には「TOYO MENKA KAISHA」の文字がある。印刷は、多色刷りの後に金刷りを行っており、着物の模様などに金柄が刷られている。全面にニスが塗布され、光沢を与えている。

3　以上の商標は、当時印刷・商業デザイン・紙業を営まれ、商標の制作も行われた奈良県在住の斎藤洋氏が手がけられたり、サンプルとして収集・保管されてきたものである。斎藤洋氏によると、綿布の商標で、輸出用綿反物の巻の末端にとめられたものであるという。

これらの絵柄には「如意」「壽老人」「金鼎」「鼎發財」などといった道教的画題が選ばれていること、画風がきわめて中国的であること、画印に中国名を伺わせるものがあること、漢字表記が「東綿洋行」とあり、中国語での貿易会社を示すことなどの特徴が指摘できる。これらは、少なくとも漢字圏の、中国語および道教的説話の共有された地域・集団向けの輸出商標と見なしてよいと考えられる。

東洋綿花株式会社は、戦前に中国本土に香港・上海・天津・大連・北京・漢口・奉天・青島・徐州、シンガポール・ジャワなどにも支店・事務所を有していたが、敗戦とともにこれらは閉鎖されている。当時の東洋綿花株式会社の中国・華僑向け輸出は、当然にGHQの監督下にあった。東洋綿花株式会社は、当時海外の足場をすべて失っていたが、この時期にこのような中国・華僑向けの輸出商標が準備されていたことは興味深い事実であろう。

第4図

平成７年度調査報告

――千葉県下の遺跡と博物館――

平成７年度博物館資料の調査について千葉県下の遺跡・博物館を調査したのでここに報告しておきたい。

本学所蔵資料出土地としては、千葉県銚子市余山町「余山貝塚」の土器、石器、石斧、骨格器等の資料が10数点あり、未整理資料として収蔵されているので、この遺跡を中心に古墳、国分寺及び博物館施設を見学した。

網干善教館長（文学部教授）が同行され、指導して下さった。

10月13日11時30分東京駅へ着く。案内者の**徳田誠志**氏（宮内庁書陵部陵墓課）の出迎えを受け早速遺跡のある千葉県下へ向う。

最初に香取郡小見川町にある「城山１号墳」と出土遺物を見学する。この古墳は全長68mの前方後円墳であり、付近に前方後円墳、円墳が存在している。墳頂部に円筒埴輪、中段に人物、馬、家などの形象埴輪と円筒埴輪がめぐっていた。内部主体は切石による「左片袖型横穴式石室」で、玄室長4.5m、幅1.3～1.7m羨道約２ mであった。出土品は三角縁三神五獣鏡、トンボ玉、丸玉、銀製空玉、金環、銀環、環頭大刀、など多量の遺物の出土があった。その他馬具類も出土している。６世紀後半の古墳と推定されている（『小見川町教育委員会報告』）。

次に本学所蔵資料の出土地「余山貝塚」を調査見学する。この貝塚は千葉県銚子市余山町にある縄文後期の貝塚で、明治30年に土器、石器が報告されてより、その名が知られるようになり、以来多くの研究者により発掘調査がされている。しかし長期間の乱掘があり、その出土品は全国に散逸し、博物館施設や個人が所蔵している状態である。

学術報告として『東京人類学会雑誌』をはじめ、諸々の学術雑誌、学会誌などに断片的に報告がある。余山貝塚の資料図録として昭和61年３月國學院大學より『余山貝塚資料図譜』が刊行された。この図譜は國學院大學が所蔵する多数の資料と他機関の資料も調査収録されており、本学資料も若干収録されている。資料とともに参考文献等も未備にあり、学術研究上非常に参考となる文献である。

余山貝塚は利根川の右岸その支流である高田川東岸の沖積地に立地し、銚子市街地より約５kmの距離に位置する。遺跡は海抜７ mの砂丘上に占地し、沖積地である水田面との比高差は約２ mを測る。現在は長年にわたる発掘や据削され、ほぼ完全に消滅し、「余山貝塚」の石碑が淋しく建っていた。本学資料との対比を考え、遺跡及びその周辺を廻り若干の土器片を採集した。この遺跡の年代は縄文後期前葉加曽利Ｂ式に開始され、晩期前葉（安行式）に終焉したと考えられている。^{14}C炭素測定により実年代に対比すればBC3700年から2500年にいたる約1200年間に相当する。本館所蔵資料は大洞Ｂ式土器であり、この貝塚より出土したものではなく、東北地方よりの搬入品と考えられると推論されている（『余山報告図録』）獣骨、骨製品等の遺物があるので、これらを使用し、実年代の年代測定なども行なってみたい。骨製品の裏面に墨書されている文字は他の諸機関へ所蔵されている文字と類似しているので、発掘された時

余山貝塚遺跡遠景

やす・余山貝塚出土・本学蔵(「余山貝塚資料図譜」より)

は同時で、その後散逸し方々の所蔵者の手を経て現在の諸機関へ収まったものと思われる。

翌日の第２日目（10月14日）銚子を出発し犬吠崎の自然と著名な大吠崎燈台を見物する。燈台の中へ入り展望台より周辺を一望する。晴天で見事な大平洋の波と空が美しい。九十九里道路を走行し木更津へと入る。そして「金鈴塚古墳」「内裏塚古墳」を見学する。「金鈴塚古墳」は千葉県木更津市長須賀の小櫃川下流域の沖積地にある前方後円墳である。附付に弦巻古墳、元新地古墳など多くの古墳が存在する。金鈴塚古墳の規模は周堀をもつ全長95m、後円部径55m、前方部幅72m 前後で３段築成、葺石、埴輪のない古墳であった。出土遺物は多量かつ華麗で、鏡、勾玉、棗玉、丸玉、金・銀環、櫛、金モール、環頭大刀、圭頭大刀、鉄鏃、衝角付冑、桂甲、刀子、馬鐸、鈴、水晶、切子玉、その他馬具・須恵器、土師器などが出土し、近くの金鈴塚遺物保存館へ保存展示されている。７世紀代の築造と推定されている。この石棺に残された歯の鑑定から埋葬人物は20歳前後の青年と推定されたので、立派な出土遺物から国造級の人物が埋葬されたと考えられている。引続いて周辺の内裏塚古墳群を見学した。

10月15日（月）９時より「金鈴塚遺物保存館」を見学する。多量の出土遺物の中でも５個の金鈴は素晴しく、この金鈴にちなみ「二子塚古墳」を「金鈴塚古墳」と改称して呼ぶようにしたのである。この鈴は大刀のそばから出土しているので大刀飾りの鈴と推定される。展示においては壁面を利用し、大刀の移り変わりや市内の主な古墳の時代が説明されていた。この地方へ出向い際は是非見学しておきたい施設であると思う。続いて「千葉県立上総博物館」を見学した。木更津市太田山公園内の高台に位置し木更津市が一望できる。昭和46年１月千葉県で最初の県立博物館として設立され、総合博物館として発足した。その後は多くの博物館が設立したため、地域に密着した歴史、民俗・美術工芸資料を中心に展示されている。私達の訪れたときは「井戸堀り」の技術の展示で、この地方独得の「上総堀り」が文政年間頃に発達し現在までの歴史が展示解説されていた。また館蔵資料展として「浮世絵版画展」が開催されていた。友の会活動も盛んで、年間行事として、講演会、研修、表装、篆刻、土器づくりなどを実施し、会報の発行などに報告されている。最後に「上総国分寺」跡を見学した。この国分寺は千葉県市原市国分寺台にある古代寺院址であり、伽藍地は二町四方を溝で囲み、さらにその外側を広く溝で囲んでいる。全国に残る国分寺跡と同様の規模であり、中門、回廊、金堂、講堂、経蔵、鏡楼があったと推定されている。時間的に余裕がなかったので充分な見学も出来ず残念であった。３日間にわたりご案内下さった徳田誠志氏に厚く御礼申し上げるとともに見学先でご説明下さった関係者にお礼申し上げます。**【角田芳昭】**

金鈴塚遺物保存館

上総国分寺碑

（9ページより続く）
も深かったらしい。筆者が高校から大学に移るころ、倉敷の大原美術館を訪れたあと、氏に「シャヴァンヌの漁夫の絵がありました」と告げると、「そうですか漁夫がありましたか」としばらく感慨深げに想い出にふけっているようであった。もちろんそのとき筆者の見て来た「漁夫」と藤村がパリで接した「漁夫」とが同一のものであった筈はないのであるが。それよりも何よりも、氏の最後の作『東方の門』の命名はシャヴァンヌがマルセーユの港を描いた「東方の門」という絵の題名から来ていることは周知のことである。

最晩年、一時藤村はエル=グレコの英文伝記に読みふけり、さかんにアンダーラインをほどこしていたことがある。夫人静子（筆者の叔母）は「生活にも芸術にも一途であったエル=グレコの生涯にひかれたのだと思う」といっていた。一途といえば、藤村の彫像を彫った石井鶴三も一途であった。そのころ彼の描いた吉川英治の『宮本武蔵』の挿絵は、心のこもったもので、いわゆる挿画を超えるものとして有名であったが、藤村が新潮社から全集を出すことになって表紙の装幀を石井氏に依頼したところ、石井氏は表紙の中心の丸い輪の中に波をカット風に描いたが、この準備のため、荒波で名高い千葉県九十九里浜の宿に一週間滞在して毎日海を眺めて暮したという。又、藤村像を粘土から桜材に移すときも、適材を求めて自ら山にわけいったという。次男鶏二の友人の中では、のちニューヨークで抽象画を描いて有名になった岡田謙三をかわいがっていた。岡田氏も一途な人であった。そのころも二科展は毎年秋上野で開かれていて、普通、会員たちは初夏から夏にかけて、出品作の作成に精を出したらしいが、岡田氏は書道の書初めのように、元旦に出品のための大型キャンバスの前に座り筆をとったという。

昭和18年夏藤村が急逝したとき、長男楠雄は「父は努力の人でした」と新聞社のひとに語ったが、藤村自身一途であったことはまちがいない。

編集後記

第33号をお届け致します。今回も原稿をお寄せ下さいました諸先生に対しお礼申し上げます。

平成8年4月の職員の異動において網干善教館長の再任と新採用者山口卓也主事が学芸員として配属されました。皆様のご指導よろしくお願いいたします。また小林弥生子学芸員も2月より復職し「内藤湖南」企画展を担当し好評でした。「考古学入門講座」も第6回となり平成6年に引続き7年は「古墳出土の遺物」と題し、5人の講師により馬具、埴輪、石製品、弓矢、土器の講演がなされ、毎回約300名の受講者が熱心に聴講下さいました。共催下さいました事業課の担当の皆様にお礼申し上げます。

博物館として公開したことにより、資料寄贈の申し出や反対に貸出依頼もかなりあり担当者が応待に追われることもあります。所蔵資料に対する一段の学識をそなえることが望まれます。

青森県三内丸山遺跡で縄文遺跡が発見され、縄文時代が注目されています。表紙の資料は「**縄文土器**」で注口土器といわれるものです。古くは土瓶形土器、急須形土器などと呼ばれていた土器で、縄文晩期後半の大洞C_2式土器に分類されるもので、東北地方を中心に出土しています。口径7.8cm、最大径11.4cm、高さ6cmです。　**〔角田芳昭〕**

関西大学博物館彙報　No.33　平成8年9月30日　発行
関西大学博物館　編集
ナニワ印刷㈱　印刷